

東奥日報

2017年(平成29)5月9日火曜日(16)

八工大・田中准教授 JICA事業参加

環境問題「解決したい」

地球温暖化や海洋酸性化の解決策を探ろうと、国際協力機構（JICA）などが東南アジアで本年度から本格的に始めた研究に、八戸工業大学の田中義幸准教授（47）が海洋生態学の専門家として参加している。現地に出向き、海草やマングローブの保全戦略などについて検討する。4月の調査を終え帰国した田中准教授は「地元の人に科学的な知見を伝え、協力して環境問題の解決につなげたい」と意気込んでいる。

（新村菜穂）

マングローブや海草などの沿岸生態系は二酸化炭素（CO₂）を吸収し、海底に堆積することで炭素を大気や海水から隔離する働きがあることから、その保全が温暖化や海洋酸性化対策につながるとされている。研究はJICAや科学技

術振興機構（JST）がグローバルな問題解決のため行う「地球規模課題対応国際科学技術協力プロジェクト」の一環で、期間は本年度から5年間。沿岸生態系が環境変動で受ける影響などを調査し、保全策を検討する。

同大学や東京工業大学など国内の研究者がフィリピンやインドネシアの大学と共同で研究を進め、現地の環境保護を目指す非政府組織（NGO）や住民とも協力。研究期間終了後も地元の人材が調査を継続できるように目指すという。

陸奥湾のアマモなど、主として海草の研究を続けてきた田中准教授は「青森を含め各地で研究を続けてきたことで、今回の研究メンバーに選ばれたのだと思う。八戸の学生にも刺激になれば」と話している。

アジアの海草、マングローブ どう保全



大型台風のため倒れたマングローブ林＝4月23日、フィリピン（田中准教授提供）



プロジェクトの概要を説明する田中准教授

※ 「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」